

## 様式(7)

報告番号	甲 保 第 38 号 乙 保
論 文 内 容 要 旨	
氏 名	富澤 栄子
題 目	Factors related to the uncertainty mild stroke patients experience during treatment (軽症脳卒中患者が療養中に抱く不確かさの関連要因)
<p>【目的】本研究の目的は、軽症脳卒中患者が発症後に抱く病気の不確かさとその関連する要因を明らかにすることである。</p> <p>【方法】研究対象者は、脳卒中を発症し、外来通院もしくは病棟に入院している脳卒中患者のうち、認知症がなくコミュニケーション可能な者であった。病気の不確かさを質問紙「病気の不確かさ尺度(Universal Uncertainty in Illness Scale:UUIS)」(26項目6下位尺度, 得点範囲26~130点) および「健康関連QOL ; SF-8」(8項目, 5~6段階リッカート方式)を用い、調査した。診療録から抽出した項目は、患者の年齢, 性別, 脳卒中病型, 発症後の期間, 重複疾患, 脳卒中の再発の有無, 脳卒中重症度National Institutes of Health Stroke Scale (NIHSS)の程度, Barthel Index (BI)によるADLの評価, 同居家族の有無であった。分析は、基本統計量を算出した後、脳卒中患者のUUISとSF-8との相関についてSpearman順位相関係数で行った。UUISの年齢別, 脳卒中病型, 発症後の期間, NIHSS, ADL (BI)の比較はKruskal-Wallis検定を用い、性別, 重複疾患の有無, 脳卒中再発の有無, 脳卒中後遺症の有無, 同居家族の有無の比較はMann-Whitney 検定を用いた。つぎにUUISの関連要因を探索するために、有意の差を認めた項目について、UUISを独立変数とした重回帰分析を行った。有意水準は5%未満とした。徳島大学病院医学系研究倫理審査委員会にて承認を得た(承認番号3134-1)。</p> <p>【結果】脳卒中患者146名から回答を得た。平均年齢65.9 (SD13.9)歳, 男性82名(56.2%), 女性64名(43.8%), 発症1か月未満の急性期38名(26.0%), 発症1か月以上18か月未満の回復期39名(26.7%), 発症後18か月以上の維持期69名(47.3%)であった。脳卒中患者のUUISの平均は、72.0 (SD23.1)で、特に急性期の平均得点は82.0 (SD23.3)と高かった。またUUISは、脳卒中病型 (p=.031), 発症後の期間 (p=.006), 脳卒中後遺症の有無 (p=.013), 脳卒中重症度 (p=.000), ADL (BI) (p=.001)で有意差を認めた。重回帰分析では、脳卒中重症度, 発症後の期間, 年齢が脳卒中患者の不確かさに関連していた (<math>R^2=.221</math>)。</p> <p>【結論】軽症脳卒中患者の不確かさは、病型や発症後の期間により他疾患と比べて高値であった。脳卒中重症度, 発症後の期間, 年齢の3項目が脳卒中の不確かさの関連要因であった。脳卒中重症度が高い患者においては、丁寧な病気に対する説明・補足が必要であること, 75歳以上の高齢者や発症1か月未満の患者においては、脳卒中により生じた障害や治療などの複雑な情報を丁寧に説明することが示唆された。</p>	